

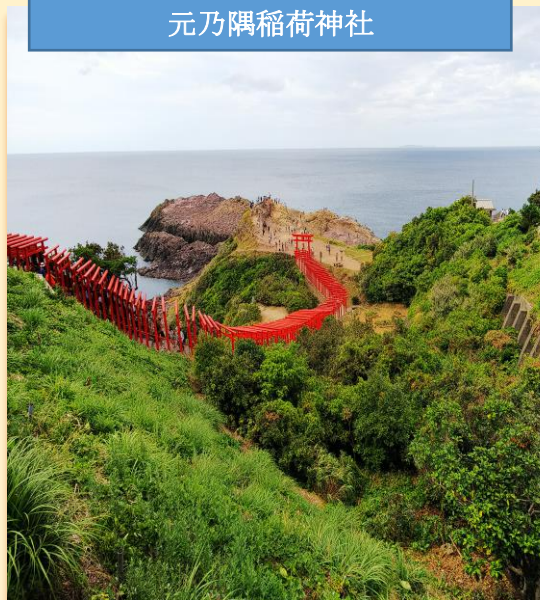
2019 年 3 月

シニアの文集《あゆみ 2 号》

姫路城（白鷺城）改修直後



元乃隅稻荷神社



防府向島の寒桜（「蓬莱桜」新品種認定）



AYSA 西部部会「開催セミナーの歴史」の展示

AYSA 西部部会

目 次

1. 「太平洋航路を楽しめなかった話」・・・・・・・・野田 隆太郎 p 1～2
2. 「平成 30 年の振り返り」・・・・・・・・下村 文博 p 3.
3. 「ルーツを探して～父母のこと～」・・・・・・・・浅田 宏之 p 4～6
4. 「戦国時代についての一考」・・・・・・・・高瀬 清流 p 7
5. 「科学者信仰と科学者」・・・・・・・・安宅 喜久雄 p 8～9
6. 「私の自治会活動～ご近所とラジオ体操を始めました～」宮本 政英 p 10～11
7. 「山口・宇田温泉での大学同窓会」・・・・・・・・北見 幹治 p 12～13.
8. 「80 歳、第三の人生」・・・・・・・・江本 明夫 p 14
9. 「雑感―新聞広告」・・・・・・・・長井 宏文 p 15
10. 「東京オリンピック・パラリンピック今昔」・・・・・・・・宮崎 修五 p 16～17

太平洋航路を楽しめなかった話

AYSA 西部部会 会員 野田隆太郎

昨年の師走はさすがに驚いた。9月ごろから食欲が衰えてきていたが、12月帰宇と同時に、エコー診断で胃の出口(幽門)が閉塞と判明し、山口医大病院でのCTや胃カメラでステップ4の末期と宣言された。生まれて初めての入院と、バイパス手術で何とか食事ができるようになり、抗がん剤でさらなる転移を抑える治療を行っている。

3週間の入院は、食事に問題がある以外退屈で、久しぶりに「どくとりマンボウ航海記」を読み大いに楽しませてもらった。小生が社会に出た当時(1956年)もはや船旅ができるのは定年後の余裕ある生活の中に限られ、業務出張で船旅ができるのは不可能とみられていた。

一方当時の企業の状況は米国参りが盛んで、小生も何とか留学できないかと、フルブライトを受験したが成功せず、また米国側も企業派遣の留学生は私費(企業負担)との意向が強くなっていた。フルブライトの全額補助留学は小生のいた企業で唯一人であった。渡航費補助のみのケースでも、唯一人である。

さて小生も企業が始めた留学費用補助に切り替えて初回に応募し何とか成功した。但し先輩が先行することになり、出発は1年延期となった。この1年は準備を可能にした素晴らしい期間であった。当時すでに海外駐在員は増員となり、6ヶ月の語学研修が行われていた。小生も後半の3ヶ月(1962年1月～3月)日米会話学院(東京四つ谷)に入れていただいた。

留学先は前期が9月から始まる筈で、1962年は3か月四つ谷で過ごし、春にはプレジデントラインでハワイへ船旅、英語の研修を受けたのち米国西海岸の学校で英語研修、夏に留学先で入学手続きと素晴らしい計画を立てた。ところでこの案はフルブライトの標準プログラムである。予想されるようにこの計画は一瞬で消し飛んだ。

当時のプレジデントラインは渡米する留学生にとってあこがれの船旅であった。APL(American President Line)は米国大統領の名前を付けたウイルソン、クリーブランド、フーバーの三隻で太平洋航路に就航していた。特に日本では、1950年～1960年にかけて前半の2隻の知名度は非常に高く、交通公社の時刻表に両船の運航予定が記載されていた。総トン数15,456、速度21ノットである。

ところで、“どくとりマンボウ”の乗った船は水産庁の漁業調査船、総トン数602.95と記載されている。

一方、企業側は稟議が通っており、即出発しろと、留学先も入学許可したのだからすぐ来いと。おかげで、船旅の荷物は日通が作ってくれた大きな木箱は、携帯物として無料では航空機に積めないと判り、東京であわててトランクを仕入れすぐ出国手続きに入った。それでもパスポートは2月13日に受領し、米国大使館はビザを翌14日にくれ、外貨受け取りは20日、何とか21日に出国している。以上が夢と消えた船旅計画である。

当時は航空機もハワイに寄り、米国入国、西海岸で国内線に乗り換えた。国内線ではも



乗船が夢と消えた

プレジデント ウイルソン号



New York 往復ドライブを楽しんだ

愛車ポンティアック（学校の駐車場）

はや日本人の顔は見られず、到着時の空港でゆっくり出てゆくと、老婦人から“Are you Mr. Noda?”と声をかけられホットしたと覚えている。留学生受け入れの組織が出来ていた。若いご夫婦にも紹介いただき、学校の寮まで案内くださった。

寮では早速企業派遣のお二人にガイダンスを受け、英語の研修もかねて、日本人留学生受け入れを楽しんでおられる老婦人のところへ下宿することにした。当地の大企業の元社長夫人で一人住まいとなり、大邸宅を整理し、マンション住まい（7部屋以上か）で、ピアノを弾いたり、友人とカードゲームをしたりとの余裕たっぷりの生活とみられた。

学期の途中で入学し、不自由な英語でガイダンスを受け、なんとか授業に出たが、後半の3か月は下宿での老婦人との会話と、専門の分野の講義や先輩との共同レポートの作成等で何とか過ごした。夏休みに入って、指導教授がヨーロッパ旅行中交通事故にあわれ、亡くなられた悲しい思い出がある。

この年の夏休みには、新しい企業派遣の方々や、医学部の先生方、大学派遣の博士等が来られ、新しいコミュニティが出来て大旅行もしたが、ここでは省かせていただき、次の年の1963年7月30日に帰国の際、会社に無理をお願いし、遂に太平洋航路で神戸に8月16日着き入国できたことを記させていただく。

乗船予定の新日本汽船“HIEHARU”がLos AngelesのLong Beachに入港したのでまず港へ帰国荷物と共にたどり着いた。ところが港湾荷役のストライキとかで出航が決まらず、小生もホテル代が乏しくなり、乗船させていただくことになった。小生は唯一人の1等船客で、あとは日本訪問の若い米国人夫婦と、留学帰りの日本人が2等船客であった。

船は貨客船で5000トン位、ロスから神戸へノンストップで航行した。2週間の船旅は海が見えるのみで、イベントもなく、乗客の四人は毎日ロビーでレコードを聴たり、雑誌したりであった。時には甲板に出てゴルフのスイングも楽しめた。船員の方々は麻雀が時間つぶしに最適か、楽しんでおられた。勿論乗客には声が掛からなかった。

大きな船のゆっくりしたゆれには強く船酔いはなかった。瀬戸内の釣り船では散々船酔いになやまされたが。

以上

平成30年の振り返り

AYSA 西部部会 会員 下村 文博

2月：2か月の孫が宇部に初見参、懸命にミルクを与える娘の母性に安心。

4月：水天宮にお宮参り、その機会に西村啓一国際特許事務所創設4周年に出席、彼は独立し一人でスタート、心配したのですが現在は弁理士3名、スタッフ2名の5人態勢に。50になりまさに働き盛り、激務の傍ら異業種交流会をリード、交友は広く、飽くなき好奇心、フットワーク、献身は出色。

7月：他人事と思っていたお盆の風物詩、人もすなる、孫の空港での出迎え、見送りを初体験。

9月：築地場外に店を持つ友人のSさんが来山、新妻帯同でびっくり、Sさんは79、再婚の奥様は70で台湾の方、10数年前奥様を、2年前事業後継者のご長女を亡くされ、意気消沈されていましたが今は元気いっぱい、元早大自動車部のSさんの運転で角島、長門、萩、秋吉台・秋芳洞をドライブ、まさに人生は気持ち次第。

12月：整形外科ではなかなか埒が明かない腰痛に針治療を初体験、気のせいか痛みは緩和、また山大病院で僧帽弁閉鎖不全を精査、中等度で経過観察、との診断で一安心。

年末年始は、まだ2回目の孫の空港での出迎え、見送りを予定。

（平成元年9月）

43の小生は、長男高1、長女小6の時、宇部から東京に単身赴任、残暑厳しく、入った独身寮はエアコンなく大変な時にたまたま札幌出張があり恵庭のサッポロビールに級友N君を訪ね、息を吹き返し、その後も彼の赴任先、名取、船橋、群馬、日田、川口を訪問しては出来たての生ビールで歓談。

5年前の1月、無二の親友は、風呂場で突然死、ヒートショックでした。

（新元号になる平成31年）

73の小生は、長女のJICA職務復帰の支援、孫のケアのため、この春宇部から東京に移住予定。

中高、大学、また仕事で出会った友人、知人たちとの再会、交友を楽しみにしています。

人間万事塞翁が馬 人間到处有青山を思いつつ、平成30年12月21日記

ルーツを探して！ -父母のこと-

AYSA 西部部会 会員 浅田 宏之

米国の作家アレックス・ヘンリーの「ルーツ (Roots)」を記憶されている方は、どれくらいおられるでしょうか？ 1977 年初めに米 ABC がテレビドラマ化し、8 日連続で放映したところ、平均視聴率 45% を記録した伝説的な作品である。日本でもその年の秋にテレビ朝日系列で放映され、テレビに張り付いて観た。その直後の東京出張の折に、丸善で原書のペーパーバック (729 ページ) を買い求め、一気に読み終えたことを覚えている。物語は、ヘンリーの祖先であるクンタ・キンテが西アフリカのガンビアで生まれ、1767 年に奴隷狩りに捕らえられ、アメリカに奴隷として売られ、その後の 3 代の苦難の足跡を辿ったものである。このドラマが放映されると、移民の国アメリカでは、アフリカ系に限らず自身のルーツを探し求める所謂「ルーツ探し」の一大ブームが沸き起こったと言われている。

ところで、NHK の「ファミリーヒストリー」は、著名人のルーツを辿る番組である。実は数年前に「私のルーツはどうなっているか？」と、ふと思いついて少し調べたことがある。

父方：浅田隆孝（明治 32 年 1 月 19 日～昭和 48 年 4 月 19 日、享年 75 歳）は、幼名百三と称し、鳥取県東伯郡由良町の農家の次男で生まれ、13 歳の時に松江市寺町の浄土宗東林寺に小僧として修行に出された。実家は小作人であり、また、父親が若くして亡くなったため、食費扶持を減らすために寺に出されたと父から聞いた。私が幼い小学生の頃、すぐ上の兄貴と夏休み中父の実家に滞在し、海で貝を採ったり、砂丘地のスイカ畑に水やり（底に穴を開けた桶に池から水を汲み、天秤棒で担いで散水する）を手伝ったりして過ごした思い出がある（私は幼かったから正直余り手伝ってはいない？）。父は、生前自分の親や祖先のことを私の兄妹にもほとんど話さなかったらしい。そこで、3 年前に一念発起して父の実家（長兄竹次郎の曾孫が相続）を訪ね、祖先の手がかりを得ようとしたが、既に代が変わって記録がないとのこと。その理由の一つが、戦前に神道に改宗したためお寺との縁が切れ、過去の位牌などは廃棄されていた。仏に仕えていた父が多くを語らなかったことが、何となく理解できたが・・・

母方：舟谷ユリノ（明治 36 年 6 月 19 日～平成元年 5 月 16 日、享年 87 歳）は、島根県能義郡広瀬町の浄土真宗勝願寺の 5 人兄妹の次女として生まれる。広瀬は、現在は安来市に編入されたが、戦国時代は尼子氏が治めていた城下町で、山陰一の街であった。16 世紀半ばに毛利氏が尼子氏を攻めて、5 年に亘る攻防の末難攻不落の月山富田城は

陥落し、尼子氏は一時滅びた。主君義久はじめ尼子3兄弟は、従者と共に安芸高田で幽閉された。残された家臣たちは、尼子家再興のために三度戦いを挑んだが、何れも失敗に終わった。その中心にいたのは、山中幸盛、通称鹿介である。「願はくは、我に七難八苦を与えたまえ」と、[三日月](#)に祈った[逸話](#)が有名である。

母の実家の勝願寺は、月山城の要塞を守る富田川の流れを挟んだ対岸の街の中心地の高台にあり、城下町の名残がお寺が連なっていた。その中でひと際大きな伽藍の佇まいで、住職の祖先は山中氏の末裔であると言われていた。それが母の自慢の口癖であったが、敢えて真偽の程を確かめる心算にはならなかった。それが母の心の支えになっていたことは確かであったから……

幼い頃、山陰線荒島駅と広瀬を結んでいた一畑電鉄の電車に乗って、母に連れられてよく行った記憶は今でも鮮明に覚えている。母は5人兄妹であったが、何れも寺に嫁で、また養子に行っているの、叔父・伯母や従兄たちとの触れ合いは、勢い母の方が濃密になっていたように思う。自分はお嬢さま育ちで父と結婚するまでほとんど家事をしたことがなかったと言っていた。しかし、松江の郊外の貧乏寺の住職になっていた父と一緒に、生活は一変した。やることなすこと全てが初めてのことで、随分苦労したと後年語っていた。「産めよ増やせよ」と、国家の方針に従ってかどうかは定かではないが、9人の子供を育てた苦労は、筆舌に尽くし難い。

母の苦労話をするのに、父のその後のことを述べないと理解してもらえない。父は、若くして無住の寺を引き継いでいたが、父が修行した寺の住職が、知恩院勤めで寺を留守にしていたこともあって、執事として師匠の寺の切り盛りを一手に引き受け、ほとんど家を空けていた。さらに、若くして目の病氣(緑内障)を患い、右眼は既に視力ゼロ、残された左眼も視力がだんだん低下していった。そして、40代後半になっていよいよ薄っすらと明かりが見える程度になった(自転車ですり抜けには通うことができていた)。藁をもつかむ思いで、T大学医学部のK先生(後に教授となった)の診察を受けたところ、「手術で完治する」と診断された。父にしてみれば、正に「地獄で仏」とはこのこと。喜び勇んで手術を受けることにしたようだ。

ここからは、今では信じられないような本当の話。眼科移植の権威というK先生は、母の弟が養子に行った寺の一室(普通の和室)を借りて出張手術を行った。当時小学校3年生の私は、手術後2、3日して父を見舞いに行ったが、片眼をガーゼで覆われた父が畳の上の布団に横たわっていたのを今でも思い出す。一週間後に家に帰って来て、術後のケアで何回か義弟の寺に出かけて行っていたようであるが、暫くは光を感じるようだったと言っていたものの、やがて段々と視力が低下し、その上術後の感染症を罹り、眼球摘出手術

までに至ってしまった。

父は決して K 先生が悪いとは言わなかったが、今思い返すと完全に医療ミスである。その時は医者と患者の力関係から、泣き寝入りするしかなかった。私が成人してこの話を知人の眼科医に話すと、最新の医療をもってしても、緑内障がそうした手術で治ることはありえないと断言するし、出張手術に至っては言語道断という。(これには後日談があって、K 先生は欧州留学前で、各所でこのような医療行為をされていたと聞く。つまり渡航費用の足しになった？)

こうして、父はある日突然に完全に全盲となったので、一人で出歩くことができなくなった。そこで、小学3年生の私が父の杖の役目をするようになった。檀家などの月命日や葬儀や法要の儀式へは、学校が終わると急いで帰宅し、常に手を引いて出かけた。経や儀式の所作(結構決まりごとが多いが)は、少年期からの修行で身につけていて、全盲になっても不自由は感じなかった様子で、若いお坊さんも指導していたほどだ。感心したのは、法事などに行った先で、仏様の戒名を確認したことがなかったことである。やがて私は家を離れたので、檀家の方が迎えに来るようになり、暫くして長男に住職を譲ったが、死ぬまで寺の勤めを続けた。父は、「眼が見えなくなったが、仏様の加護によって幸せに人生を送ることができた」と、いつも感謝の念を忘れなかった。

父と母のことを綴ってきた。父、母が逝って46年と30年が経ったが、昨日の様に思い出すことが多い。残念ながら父母の親などの親族の歴史まで遡ることは出来なかった。父母からもらった DNA は、次の代に引き継がれることを喜びとして筆をおく・・・合掌。

戦国時代についての一考

AYSA 西部部会 会員

高瀬 清流

出向先の分析会社の戦略を『伸びる産業と一緒に伸びる』と考え定め、半導体や、液晶、LED等の当時『伸びていた産業』との間で人的交流を創り、実績を重ね、スピード勝負の課題解決サービスを行っていた。電子・物理の専門家に対し、当方が強いはずの材料（化学）、分析面から向かい合った。技術屋にとって面白く、個人的にはのめり込む一方、かなりスピードを要す故に何か気分転換をしなければ身体が持たないと感じ始めた50歳位から時間を作っては歴史小説を読み始めた。たまたま手にした宮城谷昌光さんの中国の春秋戦国時代を対象とした本を手始めに、多くの作品を読みました。彼の難しい言葉の使い方も初めてでしたが、漢字の語源まで遡る文体も魅力的でした。片端から読みました。

日本にも中国にも戦国時代と名付けられた時代がありますが、戦乱・領土争いという共通点も有る一方、両者はかなり異なる気がします、古代中国の戦国時代は周王朝の後半期であり、「晋」が分裂した紀元前5世紀から「秦」が中国を統一する紀元前221までの期間を指す。晋が分裂して生まれた韓・魏・趙や太公望を由来とする斉や燕そして秦の、当時勝ち残っていた七つの大国が戦国七雄と称せられ、お互いが更なる生き残りを賭けて戦った。血なまぐさい殺戮の時代ではあるが、意外に開明的な面も多く、合従連衡や遠交近攻など多数の戦国策を持った人材が広い中国大陆を飛び回り、七雄の王の前で論を競い、数十万の兵を率いて敵に向かう。旧習を廃しスケールも大きく、人の絡み合いも複雑で、眺める立場の現代人からみれば実に面白い時代だと思う。

一方、日本の戦国時代は15世紀末から16世末紀にかけての戦乱時代。きっかけは世情の不安定化（応仁の乱等）によって室町幕府の権威が低下したことに伴い、守護大名に代わって、全国各地に戦国大名が台頭した。領国内の土地や人を支配すると共に、領土拡大の為に他の領主と戦闘を行うようになった。

中国と日本の戦国時代は約2,000年近い時間の差があり、中国にはスケールの大きさや戦国策の面白さがある。一方、日本の戦国時代の影響は当（まさ）に、日本の現在史に直結し、地域性、郷土意識を今の日本人に繋いでいる。また日本の戦国期には、「一所懸命」の本音を倫理観の有りそうな「名こそ惜しめ」と謳った建前で戦った武家の歴史と各土地の誇りが今に残ります。また対峙する武将同士が契約を交わす際、破らないことを神仏に誓う文書である起請文（きしょうもん）も特筆の一つ。戦乱時に、己の知る限りの数多い神仏に誓う文書を交わし、それを相互に信じようとした民族が外にいたであろうか？（完）

科学信仰と科学者

AYSA 西部部会 会員 安宅 喜久雄

明治維新以来の日本が発展してきた根幹は科学技術とそれを発展させた科学者にあることは疑いない。その結果、多くの伝承に科学的根拠がないと「迷信」として葬り去られた、一方で科学者に対する信頼も厚いものとなっていた。半世紀以上にわたり量子力学を拠り所とした現代科学を学び信じて、化学者として糧を得て生きてきたが、科学者への信頼には疑問が無かったわけではない。この半世紀の間の感じてきた科学〈者〉と人(世間)の関りについて述べてみたい。

1955年に起きた森永ヒ素ミルクの事件では民事、刑事事件として紆余曲折の末、刑事裁判は1973年11月28日森永側の責任を認め、元製造課長一人に実刑判決、元工場長は無罪が確定した。筆者の記憶の限りでは、「前者は技術系なので有罪、後者は事務系なので無罪」という両者の判決の差の理由に当時驚きを禁じ得なかった。これ程までに技術者(科学者)の責任がそうでない人と区別されるとは思いもよらなかった。もう一つ科学者の責任で言えば、松本サリン事件での化学者の関わり方であろう、半年以上もの間、河野氏を警察もマスコミも被疑者扱いした。筆者は一時有機リン化学に携わっていた化学者として河野氏が合成することは完全に不可能と思っていた。専門科学者の意見を全く顧みない警察、マスコミに憤りを覚えた。科学者はもっと強く「河野氏によるサリン合成は原料、知識、技術、装置すべての面において全く不可能である」と警察、マスコミに対して指摘しておくべきであった。科学者を信じ切れない一例として「もんじゅ」のことも思い出す。高速増殖炉「もんじゅ」の「ナトリウム漏れ事故」以来、筆者は日本の原子力科学者を信用していない。高速増殖炉の失敗の歴史は「ナトリウム漏れ」の歴史(「ナトリウム漏れ」による失敗がもんじゅ以前に十数回も報告されている¹⁾)でありこれを克服しない限り高速増殖炉の完成はあり得ない。当然「ナトリウム漏れ」には完璧な対策が取られていると誰しもが思うところである、しかし、このような国家的大事業において致命的誤りを繰り返した技術者、科学者は今でも信頼できない。このような大失敗をした原子力科学者達が主導している日本の原子力政策に対する心配が杞憂に終わるように願うばかりである。

科学への信頼を逆手にとってメディアではあたかも科学的と思わせる、放送、宣伝が行われていることにも問題がある。テレビで流される健康法には合点がいけない。その検証方法は科学的と言われる**二重盲検法**とは程遠い方法で行われている。全く信用できないのが、「水素水」である。確かに水素による活性酸素除去作用を示す論文はあるが、この作用には白金触媒が不可欠である。活性酸素が発生する体内の特定の場所で、特殊な要因もなく、極微量の白金と水素が同時に存在することは天文学的な確率でしか起こりえない。

健康食品等の宣伝に多くの論文や学会発表が記載されているが、これらは動物実験や試験管中の話だったり、あるいは科学的論拠に乏しかったりするものが大部分である。マーク・ウェインはこう言っている「健康法の本を読むときは注意が必要だ。ミスプリントで命を落とすかもしれない」。

ある学会には識者（元国連大学副学長）が「ニセ科学」と断じて科学立国に警鐘を鳴らしているものまでも堂々と発表されている³。最近では政府統計まで信頼がおけない。マーク・トウェインはこうも言っている。「嘘には三種類ある、うそ、真っ赤なウソ、統計」

要するに「科学リテラシー」が我が国には殆ど育っていないのである。科学リテラシーを向上させるには高等教育の場ではなく、義務教育や高校教育において科学的思考法を徹底させることが最も有効な方法である。

科学リテラシー教育が遅れているのは「三角関数は生活に必要ない」というのと同じ程度の発想で、科学リテラシー教育（数学的、科学的思考）の重要性を捉えていないからだと考える。

1 「森永ヒ素ミルク事件」で検索すると、多くの記載がある

2 <http://www.rist.or.jp/atomica/data/pict/03/03010308/01.gif> に一覧表がある

3 「水からの伝言」安井至 化学と工業2006年9月号、日本化学会のHP から閲覧可能

私の自治会活動「ご近所とラジオ体操を始めました」

AYSA 西部部会 会員 宮本 政英

子供達も家を離れ妻と二人暮らし、63歳で定年（2004年3月）になって後、これまで世話になりながら無関心に過ごしてきた自治会、その活動に関わり多少の社会貢献をしようと思っていた。2010年頃、自治会が弁当付きのグランドゴルフ大会を年に6回やっていたので参加したのが最初のきっかけであった。グランドゴルフの後、大勢でワイワイとビールを飲みながら他愛もない大会で話をするのが楽しくて参加していた。そのうち自治会の体育部長になってくれと頼まれて引き受けた（2012年度）。2年間やればよいと言われていたが、2年後になっても、来年もやってくれと頼まれて断り切れなかった。自治会の役員のようなボランティアの仕事は、辞め時がほんとに難しいことを思い知らされた。翌年に団地の班長の順番が回ってきたのでこれを理由に体育部長を断った。

この頃、週一回の大学非常勤講師も辞め、妻が娘の出産のために長く家を空け一人で家にいることがあったが、ほとんどご近所付き合いをしてこなかったで、気軽に話の出来る人が身近に誰もいなかった。寂しいのが苦手で、まる一日人と話をしない日があるのは苦痛であった。週1回程度のソフトテニスや卓球等は始めていたが、毎日何か声をかける相手が必要なことを痛感した。

普段はご近所と無関係でいても生活に支障がないから、当然ご近所づきあいは減ってくる。毎日人と顔を合わせるにはどうしたら良いだろうかと考えた。30戸程度の団地の班長の役が回ってきていたこともあり、朝のラジオ体操をやってみようかと思った。子供が小学生のころに朝のラジオ体操に参加したことはあったが、自ら音頭を取ってこのようなことを始めた経験はなかった。だいぶ迷ったが前の自治会長とも相談し、お向かいにも一応声をかけて、2014年8月中頃から団地の児童公園でラジオ体操を始めた。班長であったせいもあり14、5人の方が参加し、毎朝やることになった。

全く何の経験も無く始めたので、とにかく張り切りすぎた。宇部市のはつらつポイントの世話までし、休むことなく毎朝6時30分にラジオ体操をやり始めた。9月、10月、11月はなんとか乗り切ったが、12月になると朝の6時30分は未だ薄暗いし寒さも厳しくなり、ラジオ体操に出かけるのがつらくなってきた。止めたいのだが言い出せない、思い悩んだ挙句、ついに12月13日の朝、暗さと寒さを言い訳にして、本日でラジオ体操は休止にしますと宣言した。春には又再開することを一応約束した。

参加者からの反対はなかったが、隣家の2歳ほど若い主人が加勢しますと申し出てくれた。この申し出はほんとにありがたかった。携帯ラジオを1週間交代で広場に持参することにし、土日は休みにした。冬の間はお休み、はつらつポイントの世話もやめた。これらのことによってラジオ体操を重荷に感じるこ

が消えた。翌年 2015 年 4 月にラジオ体操を再開した（翌年からは 3 月初旬に開始）。

その後 6 月には老人会会長の要請により、工学部通りに近い広場に場所を移した。この変更により、団地からの参加者は減ったが、広場の近所の人たちが参加するようになった。歩いて 2・3 分の距離であるが、団地からは途中で土手の上の細い農道を通らなければならないせいもあり、参加する人の顔ぶれががらりと変わった。

広場は空き家の跡地を借りて整備したものである。隣接して住まいのある老人会会長が、広場の周りに畑を作り色々野菜を植え手入れもされるから、ミニトマト、オクラ、ネギ、ちしや、さつま芋、玉ねぎなどが良く育ち、ラジオ体操の帰りに実った野菜を摘んでいただくことができる。春と秋には、玉ねぎとさつま芋の収穫をネタにバーベキュー大会も開かれた。

ラジオ体操をするのは 10 分間であるが、これを機会に挨拶をかわし短い言葉を掛け合い、互いの消息を知り必要に応じて情報交換ができる。何ということもない些細なことであるが、土日と雨天以外の毎日、とにかく顔を合わせることは、その日を穏やかな気持ちで過ごせる気がする。

始めてから 4 年半を経過した現在、参加者数は 14・5 名程度で顔ぶれも大きな変化はない。参加者の間のコミュニケーションがよくなり、自治会の運営にも大いに資するところがある。体操の後集ってウォーキングをするグループもある。ラジオ体操の集いが、人々の健康を促進し健康寿命が延び、さらには健康保険料の低下につながるかどうかは未だ実験中といったところであろうか。



早朝のラジオ体操



バーベキューの会

『山口・湯田温泉での大学同窓会』

AYSA 西部部会 会員 北見 幹治

掲載の写真は、昨年末に山口・湯田温泉で開催したS41年九大工学部冶金学科卒の九州・山口地区の同窓会に集まった諸兄の集合写真である。



大学を卒業して、福岡から関東地区・関西地区・九州地区、等の全日本各地の会社に分散していった工学部冶金・鉄鋼冶金学科の同級生は60名。各地に分散していた同窓生も、60才頃から職場の定年・退職を経て、都会から帰郷する人が増え始め、50周年同窓会を京都の聖護院で開催してから、全体同窓会は一旦保留して各地区での地区同窓会を継続している。

現在では、地区別に整理すると、関東地区20名、関西地区10名、九州・山口地区20名、物故者5名、音信不通5名と分散化しているが、大学を卒業してから53年が経過している。山口県在住の同窓生が少ない中で、是非“一度、山口県にもいらっしゃい”と案内したのが今回の九州・山口地区の地区同窓会である。山口では、温泉、冬料理の名産品『ふく料理』、山口県の『日本酒』、を堪能していただき、翌日には国宝『瑠璃光寺』と『雪舟の庭』を案内した。次回は、長崎県の壱岐島で開催することを決定して、散会した。大学卒業後、各人共それぞれの職場の第一線で企業戦士して頑張ったり、当初の10年間は時間的にも精神的にも忙しくて余裕が持てなかったが、会社内でも少し余裕が持てはじめた40才前後（卒業後20~25年経過した頃）から全体同窓会の声が高まり、初めて全員集合の同窓会を25年振りに博多で開催（60名中56名参加）されたのがきっかけで、爾来、大学の同窓会には必ず参加している。当時、全体同窓会を博多で開催した理由は、既に福岡市内にある九大学舎（箱崎キャンパス）を福岡市郊外の新生地（伊都キャンパス）に全面移転する工事が進展しており、同窓の九大教授からの学んだ工学部冶金・鉄鋼冶金学科教室は既に新学舎への移転準備は完了しており、箱崎キャンパスの旧学舎は取り壊されるので“記念に皆で見に来ないか”との提案で、箱崎キャンパス旧学舎と新生伊都キャンパスの建築構内をバス見学したことを覚えている。（昨年度、九大病院を除いて、福岡市郊外の伊都キャンパスへの全面移転が完了した）

爾来、大学の同窓会は各地区（関東地区・関西地区・九州地区）の持ち回りで2～3年毎に全体同窓会を開催することを決定し、毎回の同窓会は一泊二日で開催し、開催日の午後4頃までに入館し、入浴後、簡単な総会報告後に直ちに宴会にはいり、各人の近況報告（健康・家族・趣味など）を聞きながら雑談。初参加の仲間の顔は逢った瞬間には誰が誰だか判断できなかったが、10秒もすると思ひ出されて昔懐かしい想いで瞬間である。

一次会終了後に引き続き二次会でも飲みと駄弁り。翌日の朝食後は全くの自由行動（ゴルフ組、観光組、自由行動組、等）で、次回の再会を誓って各人想い想いの行動で自由奔放に各地に散っていくのが通例になっている。当初は、ゴルフ組の参加者が多かったので、ゴルフ場が近くにある温泉地や観光地で開催したことが多かったが、最近ではゴルフ組の参加者は次第に減少している。小生は既にゴルフを止めていたので、観光・自由行動として初めて旅したところも沢山ある。特に、思い出に残っている所は、奈良地方で開催した時に、前日に奈良～京都に向けて山中の“柳生街道”を歩いたこと、或は鎌倉・伊豆・箱根の旅、晩秋の京都、などが印象に残っている。伊豆に時には、友達の一人が百名山の踏破に挑戦中とのことで、天城峠から天城山に登ルといって別れたことを思い出した。事務局では、同窓会に合わせて出張スケジュールを調整できるように片棒を担いでくれて、半年ぐらい前に開催日程と場所の決定通知を知らせてくれたので、出張名目での旅費節約には随分助かった思い出がある

振り返ってみると、同窓生としては小学校・中学校・高等学校、大学といろいろの学友がいる。初めて同窓会が開催されたのは、高等学校を卒業して全員が社会人となって成人式を迎えた時、地元（北九州市若松区）を離れ離れになってしまっただ疎遠になり始めた頃に、地元に住む連中から同窓会開催案内のハガキを受け取った時だったと思う。その時には大学生であり、地元での成人式には参加しなかったもので、同窓会には出席できなかった。

爾来、小学校・中学校・高等学校までの地元にいる仲間同士での交流会は、例年、盆・正月の郷里帰省時の頃になると開催されているようで、実家には同窓会の案内が届いていたことが度々あったようであったが、帰省のタイミングが合わずに小学校・中学校・高等学校時代の同窓会の出席回数は地元にはないせいもあって、参加した回数はそれぞれ1回程度である。小学校・中学校・高等学校時代の学友の進路は様々に異なっており、次第に音信不通になり疎遠になっていたせいもあるが、何故か次第に付き合いが薄れていったのは仕方のないところかもしれない。地元有志が同窓会名簿を作成・配布してくれて、それぞれの時代の学友の名簿を見るだけでもやはり懐かしい。

同窓会はやはり楽しい。特に、大学の同窓会には各人とも遠隔地であるにも関わらず殆ど参加してくる。何故なのだろうか？ 以上

80歳、第三の人生

AYSA 西部部会 会員江本明夫

世の中の人には80歳をどう見ているか。
平均寿命が80数年。あと10年としてもこれをどう生きるか。
これが一般的な見方の様である。

現役を退き、あるいは60歳の還暦を迎えて、第二の人生（世間の人はこのように呼んでいる）を始めた。

日本語指導のボランティアとお寺、お宮に、その他に関わってきた。
60代に対する世間の見方はどうか。まだ元気で活動できるとみている。
70代になると、少しは違うが、まだ元気な人はいるとみている。
80歳を迎えると見方はがらりと変わるようだ。

80歳を迎えるには、第三の人生を考える必要がある。
80歳に対する世間の見方はともかく、独自の第三の人生を考えなければならない。
80代ともなると、色々な点で個人差が大きい。まさに「個」の時代である。

第三の人生はどのような基本設計と工程表を作るかが問題である。

第一の人生で海外の仕事をするようになった40代、50代では、^{ひと}他人にも自分
に対しても年齢をあまり考えないようになっていた。第二の人生（60代、70
代）でも余り考えた事はなかった。

第三の人生、80歳からは、自分の年齢をしっかり頭に入れて、出来る事、出
来なくなった事をはっきり認識する必要があると考える。

世評に左右されず、^{ひと}他人と比較しない。ということが大切である。

最近、「ホンダジェット」、「ホンダジェット誕生物語」を読んだ。
今まで他人より20年遅れていたと思っていたが、これを読むと50年は遅れ
ているように思う。今頃になって気がついて遅いが、気付かないよりはよか
ろう。まだ何かできることはあるはずだ。人生の遅れを取り戻すには、元
気で長生きすることが必要である。幸いなことにAYSA会員をお手本にす
ることが出来る。

目の前の事を片付けて、仏教の教えでもある「今を生きよう」と80歳の決意で
ある。なに「青い」？ 仕方がない。

☆

「ホンダジェット」 前間孝則著 新潮文庫 2019-01-01 刊

「ホンダジェット誕生物語」 杉本貴司著 日経ビジネス文庫 2018-12-03 刊

雑感—新聞広告

AYSA 西部部会 会員 長井 宏文

ここ半年ばかりの間 時に新聞全国紙、地方紙の朝刊夕刊を全然開かない日もありそれが数日続く事がある。野暮用にと紛れたり、もう就寝しようかなと思った時、今日は新聞を開かなかったと思う事がしばしばである。もっぱら ニュースなどの情報は、インターネットのニュースやテレビのニュース 朝、昼のワイドショーである。ワイドショーは チャンネルを変えて 同じソースによる話題の 展開を楽しんでいる。テレビ局によって切り口が異なり、見せ方の工夫も 模型やCGなどを駆使しているので、そんな見せ方を楽しんでいる。新聞は ひと頃より活字が拡大されたとはいえ、字が小さく 高齢化した身には読むのに少し苦勞している訳である。パソコンで見るニュースは 自分の好みの大きさに拡大して見える利点があるので 大いに気に入っている。

ちょっと 小耳に挟んだことであるが 最近の新聞の A 紙や M 紙を批判していてその中に広告 1 ページものが多いと 記事が少ないと言う話があった。

小生宅では 全国紙 Y 紙、地元紙 U 紙を購読しているが、そんなに広告が多いのかと思っていたところ、数日前の Y 紙夕刊に、体重計の見開き全面広告があった。おやと思って詳しく見てみたら、その日の新聞広告はほぼ同一の会社のキャンペーンであったのか 1 ページ目の下段から始まり、次ページ下段も、続いて 3 ページ目は見開き裏表すべて同社の広告であり、さらに、一部違う広告が 1, 2 あったが、最終ページのテレビ番組の下段いっぱいにはまたも同社の広告であった。これにはちょっと驚き、面食らった次第である。

広告収入は新聞社にとって大きな財源であることは間違いないことで、こちらでとやかく言うことではないが、最近やけに広告ページを多く感じている。ときには記事と見間違える 1 ページ広告、旅行、化粧品、毛生え薬、サプリメント、食品、通販製品などなどが 毎日のように多数ある。小生の新聞の読み方は 大見出しをざっと見て、興味を引く記事を精読している。週二回のクイズは頭の体操として続けている。最近英語クロスワードを始めて 賞金を狙っている。また、書籍の広告は出来るだけ目を通して、また週刊誌の広告の真偽は別にして内容を精読して雑学の幅を広げたいと思っている。

とはいえ、近年本を買って活字を読むことがとんと無くなっているが、紙の活字を読むのは唯一新聞であるので、毎日配達される新聞には敬意をもって購読したいと思っている。

「東京オリンピック・パラリンピックの今昔」

AYSA 西部部会 会員 宮崎 修五

NHK 大河ドラマ「韋駄天」～東京オリムピック囀～4Kでの放送開始となった。



(S.37年 半世紀以上前の正月 旧実家で：
当時高校1年生、左から2番目クリクリ頭、
男兄弟6人と明治生まれの母、姪2人)

第1回のテレビを見て往時を振り返ってみた。初めて日本で開催された東京オリンピック招致が決定したのは、1959年（昭和34年）、この大きな出来事は、マスコミなどで大々的に報道されたのであろうが、当時、中学2年生であった私は、そのことを、今は、まったく思い出せないでいる。スポーツといえば、「野球バカ」といわれるほどの野球少年で、野球以外は、あまり興味がなかったのかもしれない。後に、私は、読売ジャイアンツ、父は、阪神タイガーズ、よくラジオ（テレビ）を

聞（観）きながら、巨人では、長嶋、広岡、藤田、阪神では、吉田、三宅、村山、等のプレーをお互いに評したものである。翌年、大洋ホエールズが「三原マジック」でペナントを制したのは、私にとって、衝撃的なニュースであった。

オリンピック開催は、招致決定から5年後の1964年（昭和39年）、10月10日、山口県、聖火ランナーはどこを通過したのだろうか？道路の両側で聖火ランナーを応援している賑わいについてはかすかな記憶にあるが、どこを通過したか、今は、思い出せないでいる。私は、その年の大学受験に失敗し、浪人中であった。東京大学に現役で入学したクラスメイトを羨望しつつ、又、私のすぐ上の兄も、東京大学在学中で、一緒にオリンピックは、「生」で「感動」を味わいたい気持ちもあったが、何せ、受験勉強が佳境で最終仕上げの時期、興味ある競技だけテレビ（日立製作所に入社した兄から、この年にわが家にも）にかじりついて観て、心が震え、勇気をもらった記憶が蘇る。最初の金メダルは、ウェイトリフティングの三宅選手だった。マスコミをはじめ、日本中が喜びに沸き返っていたことを思い出した。続いて、日本のお家芸のレスリング、柔道や体操で金メダルラッシュが続き、日本中の盛り上がりは強烈だった（最終金メダルは16個）。一方、陸上や水泳競技は、やはり体力の差はいかんともしがたく、それでも、凄味のある海外選手の走りや泳ぎには驚嘆したものである。マラソンでは、アベベ選手。ローマは素足で優勝、東京ではドイツ製の白い靴で、甲州街道折り返しコースを走り抜けて連覇したことは、驚き。日本人では、最初、君原選手が有望であったが、予想されていなかった円谷選手が銅メダルを獲得したときは、まさしく、アメイジングであった。しかし、その後の彼の不幸は、だれも想像できず、

スポーツでも、「お国を背負って」というプレッシャーに潰されたこと、辛い思いが残った記憶がある。また、体操女子の「チャスラフスカ」、彼女の美しい演技（当時「名花」と呼ばれた）は目を見張るものがあった。彼女は、その後「チ

池上彰 現代史を歩く「東京五輪の“名花”の激動人生〜チェコ」1月13日テレビ東京で放映



ェコスロバキア」民主化運動（プラハの春）の支持表明をし、共産党との対立の中、1980年代後半からのソ連のペレストロイカによるビロード革命後の「チェコ」を支援し続けた功績が今も語り継がれている。バレーボールの金メダルへの道は、当時の大松監督の「凄味」を感じた戦いでもあった。決勝戦は、確か「ソ連」で、最後は、あっけなくマッチポイントを取り終わったような記憶がある。この時のテ

レビの視聴率は、今では考えられないほどのものであったのではないかな！当時のスポーツ競技は完全ドメスティックの「大和魂」で、精神的な技能を鍛えることが最優先であったのだろうか？その後、数十年に渡り、日本のスポーツ界は低迷期に入った。それでも、体力的に劣る日本人に合わせた、独自の知恵と工夫で長期的な育成を視野に入れ、科学的なトレーニング手法を学ぶ等、併せて、近年のスポーツグローバリズム（マネジメントやコーチング等）の浸透も重なり、近年、世界に引けを取らない体力と技能の向上が、私たちを楽しませてくれている！

ところで、大河ドラマの「韋駄天」は、初めてオリンピックに参加した、マラソンの「金栗四三」（中村勘九郎）、最初に開催したオリンピック招致成功に功績のあった「田畑政治」（阿部サダヲ）の2人が主人公のドラマである。脚本は宮藤官九郎、脇役も面白い役者さんが出演するようである。第1回を見て、明治生まれの「母」の大正・昭和初期の青春とその後、又、私の中学から高校、大学への青春が重なる背景に、なんとなく「ワクワク」感が蘇って来そうである。来る2020年（新しい元号2年）の東京オリンピック・パラリンピックは、新しい競技（ゴルフ等々）や復活競技（野球、ソフトボール等々）、又、マイナーからメジャー競技に（卓球、バドミントン等々）、さらに、スポーツのグローバル化の中で、世界でも通用する若いアスリートの「生」でのアメイジングな技の観戦も楽しみ。これからの日本のスポーツ界を背負っていく彼らが、明るい日本の未来を作ってくれることを期待している。私は2019年、この1年、大河ドラマ「韋駄天」に刺激を受けながら、2020年の東京オリンピック・パラリンピックは、埼玉にいる長男家族のところにこのこと出かけてエンジョイしたい！今学んでいる英会話力（まだまだ？）に磨きをかけ、併せて体力作りも。 （以上）